
【巻頭言】

次世代が切り拓く運動疫学の新たな地平

鎌田 真光

東京大学大学院医学系研究科

皆さんが思い描く「次なる運動疫学」とは何でしょうか？

唐突な話になりますが、私は自分自身を「運動疫学第3世代」ととらえて、日本の運動疫学発展史を（個人的に）整理しています。日本の運動疫学誕生期を、中堅・シニアレベル研究者として築かれてきた先生方が第1世代だとして、その世代とともに、若手研究者としてこの分野に取り組み始め、今ではシニアレベルとして日本運動疫学会を牽引されている先生方が第2世代。そして私たち第3世代になると、修士課程など研究者の基礎固めを始める段階から運動疫学研究会やセミナー、運動疫学関連の研究室があり、博士号は運動疫学で学位をとったと言える人、私のように運動疫学関連分野でポストク・トレーニングを海外で積む人も出てきます。キャリアを積む過程の一つひとつに、先人である第1・第2世代の先生方が作り上げて来られた学習環境・ネットワークが活かされてきました。そして今、まさに将来を担うべく基礎固めをしている大学院生の皆さんは、私の目には第4世代（4G・LTE?）に映ります。さて、皆さんに改めて問います。皆さんが思い描く「次なる運動疫学」とはどういったものでしょうか？

日本運動疫学会においても、「次なる運動疫学」を見据えて複数の活動が始動しています。先般、早稲田大学で開催された第21回日本運動疫学会学術総会（2018年6月23～24日、大会長：岡浩一朗先生）では、「運動疫学研究の今とこれから」、「運動疫学を担う熱き若手の思い—エキスパートの期待を添えて—」と題した2つのシンポジウムが開かれました。学会のプロジェクト研究では、2009年に出版された「身体活動・運動疫学研究における重要論文20本」¹⁾のアップデート作業が進んでいます（研究代表者：松下宗洋先生）。現役世代の研究者には、過去の積み重ねに学び、発展させていく責務があります。また、そのためにも、人材の育成、大学等における関連ポストの確保・新設など、学会をあげて若手のキャリア形成支援に取り組んでいく必要があるでしょう。

「次なる運動疫学」を創り上げるのは、若手からシニアレベルに至るまで、皆さん自身の活動・研究に他なりません。皆さん自身の使命（ミッション）は何でしょうか？ その使命を果たすために運動疫学はどう役立ち、そしてどう発展させていくべきでしょうか？ 道のりは険しくとも、それぞれが自身の取り組む領域において開拓者（パイオニア）となることを目指す集団・仲間でありたいものです。特に若手の皆さんには、ぜひ自信をもってそれぞれ自分なりの歩みを進めていただきたいと願っています。そして皆さんの取り組みのなかから数年、数十年後には「身体活動・運動疫学研究における重要論文」といわれるような論文が生まれることを期待しています。

文 献

- 1) 今井(武田)富士美, 中田由夫, 岡浩一朗, 他. 身体活動・運動疫学研究における重要論文20本. 運動疫学研究. 2009; 11: 17-27.